解明する手がかりを与えるものであるとともに、これもまた、一つの同時代的評価であることに違いはないと思うからである。そして、そのことは、ジャーナリズムの発展に伴う投書欄の繁栄、同人雑誌の簇生という現象をもつ、近現代文学研究にのみ許された特権といい得るのではないかと思う。もっとも、このことは、言うは易く、行うは難いことではあるが、今後の近現代文学研究者の心すべきことの一つと愚考しているのであるが、どうであろうか。

しかし、以上述べたことは、全くの瑕瑾と考えられるものと一私見とにすぎない。ともかく、島木文学は、従来、一本としてまとめられたものは、皆無であった。それが、小笠原氏によって、はじめて、もたらされたのである。その最初のそれが、お世辞ぬきに、直球ホームランであったことは、今後の島木研究が、関西弁でいえば、大変しんどいことになってしまったわけである。何れにせよ、この素晴らしい一書に、大いなる啓発を蒙ったことを告白し、感謝するとともに、本書の増補版たる決定版、さらに、かつて、『群像』誌上で、氏の名声を高からしめた私小説に関する論考をはじめとする一連の私小説論を、一書として加筆、発刊されることを、期待して、やまないものである。（明治書院「近代作家叢書」昭和四〇年一〇月刊、新書版二二八ページ、定価二八〇円）

和田洋一編『同志社の思想家たち』

河崎洋子

同志社九十年の歴史は、日本の近代化の過程に重要な位置を占めると考える。勿論国定教科書にのるたぐいの人物を生んだという意味ではない。一般の評価で計ることを許さない特異な、そしてまた同時に同志社ならでは得られない人びとを育てたということにおいてである。

和田洋一の編になるこの『同志社の思想家たち』は、若き同志社人の為に書かれたものではあるが、日本の近代思想史にいささかでも関心を持つ者にとっては評価されるにたるものであると思う。

本書には次のように八名の人びとを取上げているが、それぞれにつけた副題は執筆者の焦点が奈辺にあるかを示している。

Ⅰ新島襄　太洋上の思索（鶴見俊輔）　Ⅱ柏木義円　非戦平和のキリスト者（笠原芳光）　Ⅲ海老名弾正　思想と行動（土肥昭夫）　Ⅳ安部磯雄・山川均　同志社の生んだ社会主義者たち（岡本清一）　Ⅴデントン・周再賜　女子教育の伝統（魚木アサ・横山貞子）　Ⅵ

湯浅八郎（和田洋一）で、更に続刊を予定し、誰もが同志社の代表的思想家と考えるであろう徳富蘇峰をはじめ、芦花・小崎弘道・宮川経輝・大西祝・深井英五・留岡幸助、山室軍平・浮田和民等々の人物を取上げるとあるので期待される。

編者のまえがきにあるように、この七名の執筆者の焦点は夫々に自由な視角によっているように思う。にもかかわらず一貫性を示しているのは面白い。一言で表現すれば自立の精神であり、思想に生きるのではなく思想を生きる人びとであるということで、この点に視点を置かなければ、新島・柏木と章を追って海老名へと読み進むのがいささか困難を伴うのではないだろうか。云いかえれば、それぞれの執筆者の特色がその文体にあふれていて独立した文として読者の前に立つということであり、同時に、あらゆる意味で統括されることをこばむ個性を、同志社の思想家たちが堅持しているということであろう。

しかしながら同志社の歴史は栄光にのみ彩どられているわけではない。明治政府による天皇制の確立、植民地侵略支配、そして超国家主義的軍国主義の台頭のもとで、国家権力に屈服、挫折した歴史がある。特に日中戦争から太平洋戦争にかけての時代に顕著である。

キリスト者の戦時下抵抗の問題と取組む者にとっては、まさにこの時代に同志社の個性を守るたたかいをたたかった湯浅八郎の部分に特に興味深いものを感ずるのは当然であろう。ここでは各章については簡単にふれるにとどめて特に湯浅八郎を取上げたいと思う。

同志社において新島襄は、決して神格化されてはならない。『朝日ジャーナル』が「大学の庭」で取上げた時、同志社には創立者の精神が生きていると評したのは興味ある問題である。学内で対立が起きた時、両者それぞれに新島精神を標榜することしばしばであるが、誰にも新島精神なるものを独占することは許されない。その生存中にも学生の批判を新島は受けていたが、決して人格的交流を閉ざすものとはなっていない。かつて井上馨や伊藤博文とほぼ同じ思想をもつ人であった新島が、共同社会を支える「一人の人間」としての自覚を持つに至ったのは、一年間の大洋上の生活と思考であると執筆者は指摘し、同時に、香港で入手した漢訳聖書の一句が、「永遠にゆるがない普遍的な価値体系の中に、世界の一つ一つのできごとが位置づけられ、日本もまたその中の一つの部分として見えるように」なった新島の愛国心を、米国に帰化した浜田彦蔵の思想との違いを取上げることによって浮きぼりにしているのは面白い。同じように青年期をアメリカに過した執筆者の、祖国とともに敗戦を身に負うべく帰国したという姿勢の中に共通のものがあるのであろう。

現実を無視するのではなく、改めて自分の国として選びなおし受取りなおした愛国心、否定を媒介する愛国心は、本書に取上げた思想家たちのうち海老名を除くすべての人物に共通のものということができるであろう。

同志社の精神を、時代の潮流と別個の独立した体系の樹立に生きるものとしてみるならば、海老名弾正の章のみは時代便乗主義者として、本書の中では異質のものという感じがする。

新島襄――太洋上の思索――が同志社の思想の萌芽を解明するも

のとすれば、柏木義円――非戦平和のキリスト者――は、戦後キリスト教界の対決しなければならぬ最も緊急かつ重要な問題の提起であるといえよう。執筆者はキリスト者として、日本基督教団の牧師として平和運動の第一線にある人物だけに、切実な自己の問題として取組んでいる姿勢がこの一文に投影していて興味がある。先に同志社憲法研究所主催の憲法講座において「抵抗に生きた日本人」の一人として紹介したものを更に研究の上執筆しているから、柏木に対する並々ならぬ評価がうかがわれる。

また同志社のキリスト教についての解説があることは、キリスト教の知識に乏しい人々のためによき手引となり、海老名弾正を読む際にも自由キリスト教を理解するうえで助けとなっている。キリスト教が個人倫理に止まる時、逆流する歴史をとめる力にはなり得ない。社会倫理・社会実践の場で表明される時においてさえ歴史を創造する役割を担うことの困難さを思わせられる。柏木の果たし得なかった課題の克服は、今日のキリスト者によって受けつがれなければならぬ問題であろう。

海老名の思想と行動において、自由主義的キリスト教の真価と欠陥があますところなく表明されているなかで、我々は戦時下における同志社の姿と、安部磯雄や山川均を生んだ同志社の姿をみて、神学と社会科学との問題の困難さと重さとを思い知らされる。執筆者は吉野作造との類似性と相違点を示しつつ海老名が、特異な宗教体験をもって国家と社会に対する使命感から時代の潮流を動かして行き、理想を現実的に処理しようとしたそのことが、同志社においても飛躍的発展をもたらしたことを示している。

日本の労働運動・社会主義運動を論ずる場合、安部磯雄・山川均の名を省略することは不可能である。この二人の同志社生活の年月は必ずしも長いとはいえない。特に山川の如きは三年にみたない。にもかかわらず、同志社は両者に等しく新しい人生を生きるものとした。彼等が同志社の自由な精神をつぐ者であったことを、同志社が誇とするとき、暗い時代の汚辱にみちた歴史から目をそらせることはゆるされない。また日本がファッシズムへの傾斜を転落しつつあった時代を生きた二人の生涯から、平和憲法を持ちつつも再び暗雲の兆しを読みとる者たちの学ぶべきものが多い。

ミス・デントンも周再賜も共に日本人ではないが、日本の女子教育にその生涯をかけた人である。執筆者はそれぞれデントン女史、周再賜の両者の謦咳に接し得た人であり、その感化を体得できた人である。

デントンは米国議会の排日移民法に対し、周は日本の植民地支配に対し、それぞれ特異なしかたで批判と抵抗を示しつつ、自由人としての人間形成を目的とした教育の可能性を展開したといえるであろう。リベラル・アーツ・カレッジのになう役割が女子教育の場で果たされる可能性が多いとしても、現代日本の教育事業において再考されねばならぬ問題を指摘するものである。

最後の章は満洲事変から日中戦争にかけて国粋主義的軍国主義が権力を確立した時代に第一次の同志社総長であった湯浅八郎の、軍の介入に対する抵抗に焦点があてられていて非常に興味深い。

現存の人物を描くとき、絵筆にもせよペンにもせよ、その人を知るもののいだいているイメージをこえて、いきいきと表現されなけ

れば面白さは湧いてこない。この一文の面白さは、著者が単に同時代人であるとか、同志社大学予科の教授として身近にあったというだけではない。時代に対する興味と共に、湯浅を挫折せしめたその同じ要因によって苦汁をなめたものとしての共鳴音が、今もなお著者の中に鮮明に流れていて、それが湯浅の身構えを一そうリアルなものにしているところにある。

京都大学における滝川事件の際、若き評議員であった湯浅の言動が紹介されているのは、その後の国家権力に対するたたかいの背景としてまた当時の大学が置かれていた状況を知るうえで貴重である。

同志社総長就任の事情について、その家庭環境、特に父治郎と同志社との関係が重要な契機としてあげられているが、彼の決断をせまった内面的な要因がほかにもあったのではないか。その点にふれられていないのは残念な気がする。想像以上には出ないが、湯浅が少年時代を過した同志社には、まだ創立当初の精神がいきており、彼の渡米期間中に社会の変動につれてその学風が徐々に弱められて行ったのに反して、かつて新島襄を育てた自由で民主的な生活とピューリタンの精神が湯浅をして益々同志社的たらしめたのではなかっただろうか。「私学としての権威を自覚し云々」の言葉には、政府の手になる大学において学問研究の自由、大学の自治が犯された時にもなお、人民の手になる学園において自由が守られうるとの希望と自負がみられるように思う。あるいはそのような姿勢を是正するであろう同志社の存在を信じていたのではなかっただろうか、そして同志社の理事たちの期待をこえたものを持っていたことが、抵抗の時点において彼を浮いた存在にしたのではないだろうか。

先に著者は『キリスト教社会問題研究』第八号に、チャペル籠城事件を取上げてキリスト教の戦時下抵抗の名に値いする最初のものとして湯浅の身構えを評価しているが、軍部の圧力に対する湯浅の抵抗の姿勢にはキリスト者としてよりも、キリスト教的自由主義者・アメリカ的合理主義者としての面が強く出ている。教育勅語をよんだ時に最後の御名御璽とあるのを〝おんな〟とだけよんだというところなど湯浅の面目躍如たるものがある。キリスト者としての湯浅の姿は、林要教授の辞職と、「赤い教授がいることがはっきりしたら、その時は辞職する」との言葉通り、思想に関するけん疑で予科の二教授が逮捕されたとき遂に辞表を書くに至ったこととの二つの出来事において示されているように思うのは、湯浅自身の信仰についてふれていないからであろう。湯浅の持つキリスト教の限界とキリスト教界の持つ問題点について、今後我々が究明しなければならない課題がここに呈示されている。

湯浅の軍部に対する抵抗は、まさに蟷螂の斧であったかも知れないが、国家権力と民間右翼の勢力にもかかわらず、操守すべきものを持ちつづけたことは高く評価しなければなるまいし、ファシスト野村助教授及びその支持者をも「学識人格ともに同志社大学教授たるに適せず」と声明して共にクビを切った決断のエネルギーは、滝川事件の際のひかえめな発言に対する反省が生きつづけていたことを思わせる。と同時に、背後の圧力を知らないわけでもなかったはずの松山斌教授の論文掲載拒否の処置もまた同様に評価されてよいと思う。

なお、第一次総長時代から戦時下のアメリカ生活を経て、第二次総長時代を一貫する部分があれば、そこに更に湯浅八郎の抵抗の根拠が戦後民主主義とどのようにつながるものかをさぐることができるであろう。

ともあれ、本書を一読するとき、日本の近代化の過程において同志社の思想者たちの果たした役割と、そのなかに深く根をおろした創立者新島襄の精神が、創造性と自立性において支えとなっていることを見出すであろう。本書が、現代を生きる若者にゆたかな示唆を与えるものであることを期待して、若き人たちに読むことをすすめたい。（同志社大学生協出版部昭和四〇年一一月二〇日刊、B6版二八〇ページ）